

令和元年度 生物多様性研究分科会の活動概要ほか

大嶋辰也

1. はじめに

「コウノトリはなぜ雲南市を選んだのか」をテーマに、分科会活動として初めて平成 30 年度に現地調査（餌資源調査）を行った。令和元年度も引き続き餌資源調査を行ったが、今年は、昨年度の調査結果を活用して幾つかの地域行事に参加することができた。新聞記事にもなり、活動の場や可能性が広がったと感じている。

また、活動報告として、餌資源調査の結果だけでなく、農業土木の観点からの投稿もいただき、本当の意味での“生物多様性”が動き始めたと感じている。

本稿では、餌資源調査以外の取り組みについて報告するほか、私が気になっている雲南市の地形（大原丘陵）について、少しだけ調べたので紹介したい。

後述に以下の報告があるので、詳細はそちらを確認いただきたい。

- ・「なぜコウノトリは雲南市を選んだのか？【Vol.3 餌生物量から】」（田中秀典ほか）
- ・「コウノトリはなぜ大東町に棲みついたか～棚田と「よけじ」の効果～」（北村清）

2. 令和元年度の活動概要

昨年度に引き続き餌資源調査を行った。調査地域は、春殖地区、幡屋地区のほか、同地区に隣接する佐世地区（私の故郷）にも地点を設定した。また、昨年度の餌資源調査結果を地元の方に紹介するため、「春殖地区振興協議会への報告」、「第 3 回大東ほたる祭りへの参加（30 分ほど発表時間をいただきました）、雲南市が主催する「雲南市コウノトリ学習会」のリレートークにも参加させていただいた（表-1 参照）。その他、昨年度の研究報告をもって、3/28 には西小学校への餌資源調査報告、4/3 には佐世地区公民館・佐世小学校への飛び込み営業（？）を行った。

表-1 平成 30 年度の活動スケジュール

月日	活動内容	参加者数
3/28	雲南市立西小学校への餌資源調査報告	大嶋
4/3	佐世地区公民館・佐世小学校への飛び込み営業	大嶋
4/4	H30 コウノトリ餌資源調査報告（春殖地区振興協議会）	大嶋
6/15	第 3 回大東ほたる祭りへの出展	森脇・大嶋
7/15	第 1 回ミーティング（活動方針・調査計画等の確認）	5 名
7/20	餌生物量調査（夏季）	5 名+8 名 ^注
8/9	雲南市コウノトリ学習会（発表：リレートーク）	田中・大嶋
10/26	餌生物量調査（秋季）	5 名+4 名 ^注
11/29	最終ミーティング（とりまとめ方針など）	8 名+2 名 ^注
-	延べ参加者数	42 名
-	実参加者数	11 名+10 名 ^注

注) 餌生物量調査は、平成 29 年度まで徳島大学大学院でコウノトリの研究をされていた安達直之氏（現島根県職員）、平素から環境調査業務に従事されている平野隆之氏（(公財)島根県環境保健公社）に協力をいただいた。また、会員の知人・ご家族にも参加いただいた他、夏季調査時には国交省出雲河川事務所の方も同行された。

山林面積比率は、雲南が 58.5%～72.1%、飯南が 66.8～82.8%、弥栄が 77.1～77.9 と、飯南＞弥栄＞雲南の順であった。山林と水田が接する距離は、雲南が 4,710～5,944m、弥栄が 3,393～4,680m、飯南が 1,362～2,584mは、雲南＞弥栄＞飯南と、山林面積比率の逆の結果になった。森林の単位面積当たりの「森林が水田と接する距離（山林が水田と接する距離（m）/山林面積（m²）×1,000）をみると、雲南が 15.3～15.4、弥栄が 8.2～11.0、飯南が 3.1～7.5 であった。山林と水田は、陸域と水域が接するエコトーン（移行帯）と呼ばれ、良好な生息環境の指標となる。雲南市は、エコトーンが広がる地形条件である可能性があり、今後も何らかの地形解析を行い、生き物を育む雲南市の姿を見える化するのが、私の希望である。

表-2 餌生物量調査の主な調査候補地

地域	基準地域メッシュ（3次メッシュ）の設定
雲南地域	
飯南地域	
弥栄地域	

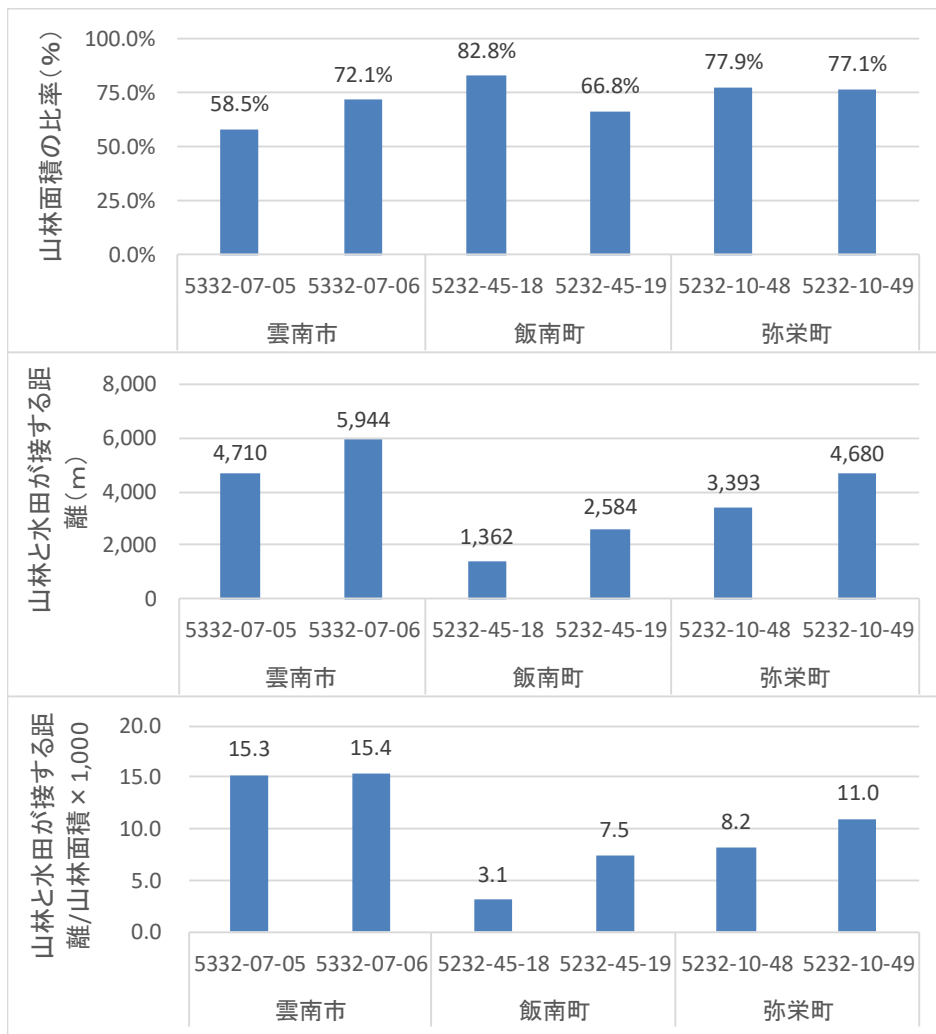


図-2 基準地域メッシュ毎の山林面積等

5. おわりに

雲南市では、「幸せを運ぶコウノトリ」と共生するまちづくりビジョン」（平成31年3月）が策定され、地元でも新たに「コウノトリ春殖」が組織されるなど、地域活動が活発になりつつある。私たちの餌資源調査の結果も、地域づくりの参考になると考えられるため、次年度以降も、引き続き取り組もうと考えている。一方、この2年間は地域に根差した活動だったので、次年度は、他の地域（豊岡市・鳴門市など）への視察も考えている。特に、最近では大学による研究活動もより広がっていることから、研究者へのアプローチもしていきたい。

最近“よけじ”の生態的な機能が評価され、“よけじ”を積極的につくる動きがある。それ自体はよい取り組みだと思うが、生態系の機能は地形、植生、人の生活が重なり合って発揮されているものと考え。雲南市の複雑な地形は、仮に単位面積あたりの生態的機能が低くても、それが細長く分布することで、他地域とは異なる機能やポテンシャルを持っているかもしれない。もっと足元を見つめて、新たな発見をしていきたい。そのためには、より広い分野の技術者が分科会活動に参加していただき、議論できればありがたい。以上